

氏 名	平賀 紀子		
学 位 の 種 類	博士（看護科学）		
学 位 記 番 号	博甲第 8219 号		
学位授与年月	平成 29 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	成人移行期にある小児慢性疾患患者のヘルスリテラシー		
主 査	筑波大学教授	保健学博士	安梅 勲江
副 査	筑波大学准教授	博士（ヒューマン・ケア科学）	村井 文江
副 査	筑波大学助教	博士（看護学）	杉本 敬子
副 査	筑波大学准教授	博士（医学）	福島 敬

論文の内容の要旨

平賀氏の博士学位論文は、成人移行期にある小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーを高める要因及びヘルスリテラシーが成人移行の準備に与える影響について明らかにしたものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は、成人移行期にある小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーを高める要因及びヘルスリテラシーが成人移行の準備に与える影響について明らかにするとしている。

（対象と方法）

研究 1 では、小児科外来に通院している 15 歳から 30 歳の慢性疾患患者 242 名を対象に横断的質問紙調査を行い、メディアリテラシー、対象関係、対象の特性がヘルスリテラシーに及ぼす影響と、ヘルスリテラシーが成人移行の準備に及ぼす影響についてパス解析による検証を行っている。

研究 2 では、研究 1 の結果で明らかになったヘルスリテラシーが高い要因を持つ 6 名を対象に半構造化面接を行い、彼らの体験を質的に分析してヘルスリテラシー向上につながる体験を明らかにしている。

（結果）

研究 1 では、質問紙の回収率が 93%であり、対象者の内訳は、男性 126 名（52.1%）、平均年齢 19.2 歳（SD=3.7、range:15～30）、高校生 109 名（45.0%）、社会人 51 名（21.1%）、大学生 35 名（14.5%）であった。診断は、循環器疾患 68 名（28.1%）、血液疾患 66 名（27.3%）、診断時年齢は、平均 6.2（SD=5.7、range:0～18）歳であった。パス解析の結果、「機能的ヘルスリテラシー」は、メディアの情報への主体性や情報への批判的な捉え方によって高められ、診断時年齢が高い人や一人暮らしをしている人は高いことが示されたとしている。「伝達的ヘルスリテラシー」は、対人交流があり、情報を吟味し主体的に活用することで高められることが示されたとしている。「批判的ヘルスリテラシー」は、メディアによる情報への主体性により高められ、診断時年齢が高い人

は高いことが示されたとしている。「成人移行の準備」は、ヘルスリテラシーの高さと対人交流により促進され、年齢が高い人は準備が整っていることが示されたとしている。

研究 2 の対象者は、男性 5 名、女性 1 名、20～23 歳、診断は、心疾患 2 名、血液疾患 4 名であった。インタビュー結果の分析から、ヘルスリテラシー向上につながる体験として、【相手との関係に応じた伝え方を試みる】、【小児科医に頼りつつも自立した健康管理を模索する】、【情報源を選別し情報の信憑性を判断する】、【病気を通した親との信頼関係を基盤に自立しようとする】が抽出されたとしている。

(考察)

機能的ヘルスリテラシーは、基本的な読み書き能力を指すが、これには医療関係の言葉の理解ができているかどうかも含む。メディアの中でもインターネットから情報を得ている人は多いと考えられ、メディアリテラシーを向上させることにより、病院や薬局からもらう説明書やパンフレットを自ら読むことや、内容の理解が促進されることが示唆されたとしている。また、認知発達の点や、一人暮らしの生活における判断や意思決定の機会により、医療関係の言葉やその内容の理解が促進されるとしている。

伝達的ヘルスリテラシーは、情報を自分で探したり、他人に伝達したり、自分で適用しようとする能力であり、自分でそうしたいと思った時にそれができることや、関心があるかどうかも含む。他者との関係や交流の経験を積み重ねていく過程で、情報の獲得や伝達のスキルを獲得し、能力を高めていることが示唆されたとしている。著者は、医療者は、疾患を有する子どもと親との特徴的な親子関係を理解した上で、成人移行期にある患者の自立心を支えるとともに、親の過干渉や過保護への介入が必要であると考えている。

批判的ヘルスリテラシーは、得られた情報を鵜呑みにせず、批判的に吟味し、主体的に活用しようとする能力である。対象者は、情報メディアを主体的に活用すると同時に、情報の信憑性を判断していることが示唆されたとしている。著者は、診断時年齢の違いにより、病気であることの実感の有無、病気が生活に及ぼす影響の違い、小児科医の言葉をどう捉えるかが、情報獲得への批判的な見方や主体性に影響すると考えている。

成人移行の準備は、患者自身が健康管理を行うために必要な項目から構成されるとしている。成人移行の準備には、特に伝達的ヘルスリテラシーの影響が強く、小児期に依存していた親や小児科医との信頼関係を基盤として、自立に向かっていくことが示唆されたとしている。

以上より、著者はヘルスリテラシー向上の支援として、以下の 3 点をあげている。

1. 疾患や病状、治療の経過には個人差があることを伝えた上で、信憑性の高い情報とともに信憑性を判断する指標について伝える。
2. 患者の自立には親との信頼関係が基盤にあることを理解し、親に対しては安全基地としてあり続けること、患者本人に対しては医療者と直接的なやりとりや意思決定を患者自身が行えることを促す。
3. 診断時年齢が低い患者に対して、高校卒業の頃までに、患者が疾患を自分のこととして捉えられるよう病気を見つめ直す機会を作り、患者自身が病気について説明できるように支援する。

(結論)

著者は、下記のように結論付けている。

1. 成人移行期にある小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーは、情報メディアを適切に選択し能動的に情報を獲得、表現し、情報を鵜呑みにせず真偽を見抜く力と、親密な対人関係により高まり、診断時年齢が高い人や一人暮らしをしている人は高い可能性がある。
2. ヘルスリテラシーが高い、親密な対人関係、年齢の高い人は成人移行の準備ができやすい可能性がある。
3. ヘルスリテラシーが高い人は、「相手との関係に応じて伝え方を試みる」、「小児科医に頼りつつも自立した健康管理を模索する」、「情報源を選別し情報の信憑性を判断する」、「病気を通した親との信頼関係を基盤に自立しようとする」体験をしている。

審査の結果の要旨

(批評)

平賀氏の論文は、成人移行期にある小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーを高める要因及びヘルスリテラシーが成人移行の準備に与える影響について明らかにするため、量的研究及び質的研究を組み合わせ、全体の傾向と深みのある生の声を把握し統合した点が強みである。看護科学の博士論文として、当事者の思いに寄り添い、生涯発達を見据えてケアのあり方を提案した点は高く評価できる。

平成 29 年 1 月 30 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。